お母さんが大好きな女の子のお話

悠風詩仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お母さんが大好きな女の子のお話

【Ｎコード】
Ｎ１４０２Ｍ

【作者名】
悠風詩仁

【あらすじ】
その少女は、母を愛していた。
どれほど情欲に溺れ鬼畜の所業を成し遂げようとも、彼女は変わらず母を愛した。
『母親』だから。
世界でたった一人しかいない大切な家族だから。
だから少女は、母を愛することに欠片の疑問も抱かなかった。
そんな彼女に待つ運命とは……？

（前書き）

一人称の短編小説ですので、
一人称作品（少女目線）がお好きな方、是非力を抜いてお読み下さい。
ただし暗くて悪趣味なストーリーが苦手な方はご注意下さい。

わたしのお母さんは、お父さんとお兄ちゃんを殺しました。
それでもわたしは、お母さんが大好きです。

最初はわたしがとても小さい頃、おとなしくて無口で、真面目に会社勤めをしていたお父さんを、お母さんは多額の保険金をかけて殺しました。警察や保険会社、周りの人達は不審な点があることに気づかないままお母さんがたくさんのお金を手に入れて、おかげでわたしと二人のお兄ちゃんはとても豊かな暮らしが出来ました。

おかしくなったのは、お母さんに新しい男の人が出来た時でした。その人は目つきが怖く、いるだけでいつも空気が悪くなりました。お母さんはこの人は新しいお父さんになる人だから、仲良くしなきゃだめよと言われたのでわたしは素直に言うことを聞きました。上のお兄ちゃんも怒鳴られたりいろんなことを命令されてもいい顔をしていたので、一緒に新しいお父さんにかわいがってもらいました。

下のお兄ちゃんだけは、いつも殴られ悲しい顔をしていました。新しいお父さんをいつも避けるようにして、お母さんがおかしくなったとこぼすことが多くなりました。確かに、お父さんが死んだ後からお母さんは化粧や服が派手になったり冷たくなったりしていましたが、わたしと上のお兄ちゃんはお母さんが大好きなのであまり気にしませんでした。

新しいお父さんはいつも下のお兄ちゃんを傷つけました。暴力を振るったり言葉の暴力をしたりして、お兄ちゃんは笑わなくなりました。お母さんはそれをいつも横目で見ていました。それに時々ご飯がまずかったですが、どんなに冷たくても最後はいつも

優しかったので、わたしは気にしませんでした。

下のお兄ちゃんが高校に入学したばかりの時、お兄ちゃんは海で溺れて死にました。

新しいお父さんとお母さんと一緒に、魚釣りへ行った時のことです。

二人はすぐ警察に捕まりました。それでやっと、お父さんが悪い薬を飲まされて海に突き落とされ殺されたことを知りました。

下のお兄ちゃんも、同じように殺されました。

同じように悪い薬を飲まされて、海に突き落とされて、それでもお兄ちゃんは意識を取り戻して一度お母さんがいるボートに戻りましたが、二人が無理矢理溺れさせて海に沈められました。

お兄ちゃんは、お母さんに殺されました。

新しいお父さんにそそのかされて、お母さんはお父さんとお兄ちゃんを殺しました。後から聞いた話では、お母さんは上のお兄ちゃんとわたしにも保険金をかけて殺そうとしていたそうです。だからご飯が時々まずかったんだなと気づきました。それでもお母さんは、わたしを殺すのはかわいそうだと新しいお父さんに訴えていたそうです。

だったら、下のお兄ちゃんはかわいそうじゃなかったのかな？

だから殺したのでしょうか。

裁判にかけられて、新しいお父さんは死刑になりました。お母さんもてっきり死刑になると思って、わたしとお兄ちゃんはお父さんも死んでお母さんまでいなくなったら悲しくてたまらないので、裁判長に必死に頼み込みました。

「どんなに悪いことをしても、お母さんはお母さんだ。だから殺さないで下さい。きっと母も深く反省するでしょうから」

お兄ちゃんは土下座までして訴えました。わたしも精一杯の気持ちを込めました。大好きなお母さんを奪わないで下さい。わたしはお母さんが大好きだから、お母さんを殺さないで下さい。

この願いが届いて、お母さんは無期懲役で済みました。

うまくいけば二十年位で刑務所から出られるよと、お母さんの弁護士に言われました。

わたしとお兄ちゃんは、お母さんの帰りをずっと待っていようと決めました。いつもわたしは周りの人達にお母さんが大好きだと言い続けて、お母さんが大切な存在であることを伝え続けました。でもそんなことを言うと、みんなぎょっとした顔をしたり、憐れんだような顔をしたり、ひどい時はいじめてくるような人もいました。

それでもわたしはお母さんが大好きです。それはお兄ちゃんも同じです。お母さんはわたしたちを生んでくれた、世界でたった一人の大事なお母さんなんですから、血のつながった大事な家族なんですから。

わたしは毎日、明るく一生懸命生きました。

亡くなったお父さんと下のお兄ちゃんの分まで、精一杯生きなければなりませんものね。それなのに、みんなわたしに何だか冷たくて楽しくありません。人殺しの子とか、お前のお母さんは男狂いの金狂いの鬼畜で、子殺しなんだとかとてもひどいことばかり毎日言ってきます。

失礼しちゃう。大好きなお母さんをそんな風に言うなんて。

どんなに悪いことをしてもお母さんはお母さんなんだからと、わたしとお兄ちゃんを気にせず過ごしています。それでもたまに耐えられなくなる時があります。気を遣って話しかけてくれる同級生の女の子がいますが、みんな他の子たちにあの子は人殺しのお母さんの味方をした悪い子なんだから付き合わない方がいいよと言われて、そのうち話しかけてこなくなります。

わたしはずっとひとりぼっちでした。でもいつかお母さんが出てきて一緒に暮らす日を夢見て頑張っています。周りの人たちが何を言おうとも気にしません。

だってわたしは、お母さんが大好きなんですから。

それはきっとお兄ちゃんだって同じです。

なのに、お兄ちゃんはお友達と川遊びに出かけたきり、帰ってこなくなりました。警察の人たちは、あの場所で溺れたならどんなに増水していても見つかるはずなのにおかしいなと首をかしげていました。

わたしは毎日泣き暮らしました。心ない人たちからお父さんと次男の祟りだと言われて傷つきました。

結局何ヶ月経っても、お兄ちゃんは帰ってきませんでした。

ずっと一緒にお母さんの帰りを待っていようねって話していたのに、わたしはひとりぼっちになってしまいました。

でもいつか帰ってくるんじゃないかと思い、わたしは気がつけばお兄ちゃんがいなくなった川に足が向かってしまいます。いつも誰もいませんでした。わたしはいつもそこで、お兄ちゃんの帰りを待っていました。

そのうちわたしは、亡くなった下のお兄ちゃんと同じ十五才になっていました。きっとお母さんもわたしの成長を喜んでいてくれるだろうと明るい気持ちになりましたが、その日もわたしは上のお兄ちゃんがいなくなった川に来ていました。

そこでわたしは、お兄ちゃんが川の真ん中で立っている姿を見つけました。

お兄ちゃんは笑顔を浮かべてわたしに手を振っていました。川の真ん中で増水して、とても立てない状態なのにも関わらず、お兄ち

ゃんはまるでそんなこと関係ないかのように笑顔でした。
わたしは思わず、川が増水して危険なのにも構わずお兄ちゃんの元へ向かいました。
そして濁流にのまれて、意識がなくなりました。

気づいたら、わたしは静かな海の中にいました。
なぜそこが海だと気づいたのか分かりません。川に流されて海まで辿り着いてしまったのかなと思いました。
わたしはとにかく助からなければと思い、泳いで海から顔を出さなければともがきました。ちょうどすぐ上に一艘のボートが浮かんでいたので、助けてもらおうと手を伸ばし顔を上げようとしました。
そしたら、とても強い力で頭を押さえつけられました。
わたしは何が起きたのか分からず、ただ苦しくて手足をばたつかせました。
苦しくてたまらないわたしが水の中から見上げたのは、鬼のような顔をしたお母さんの姿でした。
大好きなお母さん。
お父さんを殺しても、下のお兄ちゃんを殺しても、わたしの大好きな、世界でたった一人しかいない大切なお母さん。
そのお母さんが、なぜかそこにいてボートの上からわたしの顔を押さえつけ、海の底へ沈めようとしていました。
大好きなお母さん。
いつか罪を償って、わたしたちの元へ帰ってきてくれることを楽しみにしていた、わたしたちのお母さん。
大好きなお母さん。
どうして、こんなことするの？
ねえ、どうしてそんなに怖い顔をして腕に力を込めて、一生懸命わたしを沈めようとするの？
ねえ、どうしてどうして？

わたしの悲鳴も届かないまま、わたしはお母さんの顔を見ていくうちに力が抜けてきて、何だか体が楽になって、抵抗するのをやめました。

何だか、お母さんを見ていたらどうでもよくなった気がしたからです。

そして気づきました。

ああ、下のお兄ちゃんはきっとすごく苦しんだんだろうな。信じていたお母さんに殺されて、きっと絶望と諦めの思いを抱いたまま深くて暗い、冷たい海の底に沈んでいったんだろうなと。

わたしはもしかしたら、とても罪深いことをしてしまったのかもしれません。

だから、お母さんだと思っていた人影が、今下のお兄ちゃんに見えているんでしょうか？

下のお兄ちゃん、とても怖い顔で笑っています。

わたしは、天国へ行くの？　薄れゆく意識の中、わたしはお兄ちゃんに尋ねました。お兄ちゃんはとても冷たく、生きてる間あんなに優しかったお兄ちゃんの姿から想像出来ないような怖い顔で言いました。

お前が大好きなお母さんは死んだら地獄へ堕ちる。

だから、お前も大好きなお母さんをそこで待てばいい。

今、わたしはとても苦しい世界にいます。

本当に苦しくて、生きてる間に感じた苦痛とは想像もつかないような辛い日々を送っています。でも悲しくはありません。すでに下のお兄ちゃんの手でここへ連れて来られた上のお兄ちゃんが一緒なんですから。一緒にこの苦しみを乗り越えていこうと思います。

下のお兄ちゃんがいないのが寂しいですが、上のお兄ちゃんも一緒だし、何よりお母さんといつか会えるんですから、ちっとも寂しくありません。

ここで頑張ってお兄ちゃんと一緒に、お母さんを待ち続けようと思います。でもちょっと心配があります。新しいお父さんまで来たら嫌だな、と。

でも今度は強く、あなたなんかいらないと反抗出来ると思います。だってわたしは、お母さんが大好きなんですから。

今度こそお母さんを守ってここで幸せに暮らしたいのですから。

大好きだよ、お母さん。

だから、頑張って生きて、いつかきっとわたしたちの所まで来てね。そしたら、ずっと一緒だからね。

ずっと、ずっと一緒だよ。

（後書き）

初めまして、初投稿です。

まずは短編から……と、早速書き終えたばかりの短編を掲載させてもらいました。

まだ物書きとして至らぬ部分が多いですが、何とか精進出来たらいいなと……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1402m/

お母さんが大好きな女の子のお話

2010年10月8日14時35分発行